



JCS NEWS

日本チェロ協会会報 第23号 (2005年7月31日)

インターナショナル・チェロ・ コンGRESS・イン・神戸2005 (ICC) ついに開催!



“チェロが響いた1週間”

5月16日(月)~22日(日)1日の雨を除いて快晴の中、日本、アジアで初めてのインターナショナル・チェロ・コンGRESS & 第3回1000人チェロのコンサートが、ICC実行委員会および国際チェロアンサンブル協会主催、日本チェロ協会、才能教育研究会、読売新聞社共催で開催されました。大会名誉総裁に高円宮妃久子殿下、大会名誉会長にロストロポーヴィチ氏、大会会長にグリーンハウス氏、シュタルケル氏を迎え、世界25ヶ国約60名の演奏者、スタッフの方々に参加いただき、神戸国際会議場、ポートピアホール、神戸ワールド記念ホールの3会場で盛大に行われました。

プログラムは、開会式後、コンサート17公演、マスタークラス25コマ、クリニック6コマ、レクチャー3公演など充実した内容で、夜にはチェロサロンも行われました。有料コンサート14公演の入場者数は10,246名(うち1000チェロの入場者数3,006名、演奏者1,069名)、マスタークラス25コマの聴講客数はのべ1240名でした。

芸術監督を務めました
日本チェロ協会堤剛会長よりご挨拶です。

インターナショナル・チェロ・コンGRESS・イン・神戸2005が予想以上の盛り上がりを見せて成功裡に終わりました。3年以上にわたる準備期間を通して組織作りか



ら企画、人選、資金集め、プログラミングそして大会の実際の運営まで実に多くの方々のお借りしました。特に主催者となられたNPO国際チェロアンサンブル協会（代表：松本巧氏）と当コンGRESの実行委員会（会長：新野幸次郎氏）そして日本チェロ協会と共に共催者となられた才能教育研究会（会長：豊田耕兒氏）と大阪読売新聞社（社長：板垣保雄氏）そしてボランティアの皆様の大変なご尽力に心から感謝致しております。加えて高円宮妃殿下に大会名誉総裁を、文化庁長官の河合隼雄氏に特別大会名誉会長を快く引き受けて頂け力強い励みとなりました。そして忘れてはならないのは最初から最後まで力強くサポートして下さい全世界に向けてのアピールや数々の貴重なご助言をして下さり、そして大会中、会長としての重責を果たされた上精力的な活動をして下さった現在のチェロ界が誇る三大チェリスト、M・ロストロポーヴィチ、B・グリーンハウス、J・シュタールケル各氏のお力添えがなかったら、とてもあれほどの成功は望めなかったと思います。

1000人強のチェロで華々しく終えた素晴らしいコンサートの数々、多勢の参加者が大変勉強になったと言っ



多くの日本チェロ協会会員の皆様にも運営ボランティア、全体プログラム登録、1000人チェロ演奏、マスタークラス受講など、様々な形でご参加、ご協力いただきどうもありがとうございました。心より感謝申し上げます。

参加された皆様の声をお聞かせいただき、今後のイベント開催の参考にしたいと思っております。よろしければ、ご意見、ご感想を事務局（溝口宛）へお寄せ下さい。

郵送、FAXまたはEメールでお送り下さい。お待ちしております。

送付先 〒107-8430 東京都港区赤坂1-13-1 サントリーホール内日本チェロ協会
FAX NO: 03-3505-1007 Eメールアドレス: Masako_Mizoguchi@suntory.co.jp

て下さったマスタークラス等。それこそ二度と起こり得ないイベント目白押しでした。全世界からのチェリスト、一般参加者、受講生、聴衆の皆様から数々のお褒めの言葉を頂けましたが、私が特に嬉しかったのは、演奏されたりクラスをして下さった方々がそれぞれの持てる力を十二分に発揮して下さいました。スケジュール、プログラミング等に関しては最後まで気をもまされ冷や冷やしたこともありましたが、今ではそれも思い出となりました。

最後になりましたがチェロ協会前事務局の児玉真氏、箕口一美さん、現事務局の飯田芳憲事務局長を始め、竹田洋太郎氏、八反田弘氏、溝口雅子さん、奥貫裕子さんの寝食を忘れた大活躍に感謝の念を表したいと思います。

会員の皆様どうも有難うございました。また何かやりましょう！

日本チェロ協会会長 堤 剛

ICCを終えて

2000年6月の全米チェロ大会の理事会に当時はまだ全米チェロ協会のメンバーでない私もオプザーバーとして、堤氏はインジアナチェロ協会のご代表として参加しました。そこで産声をあげたICC。以来私は地球を二周以上、神戸-東京を約100往復はしたくらい準備に駆け回りました。2005年5月16日~22日の一週間はその集大成となるべきものでした。招聘した内外のチェリストたち、参加者、実行委員、一般の観客の皆様には「大成功のICC」だと思えます。

ただ、私にはいろいろと悔やまれることの多いICCでした。今思えば、あまりにも会期直前にまで未処理事項を持ち込み過ぎました。4年の準備期間があることに、逆に少しの安堵感とともに油断をしたことも事実です。児玉・箕口さんたちにもう半年早くお願いをすべきだったと悔やまれます。会期一週間前からのドタバタに「被害が外に出ないように細心の注意と心配り」で采配を振るっていただいた児玉さん・箕口さんには本紙面をお借りして心からの御礼と感謝を申し上げます。

そして、オープニングからアンサンブルコンサートまで11のコンサートを大過なく取り仕切って下さった飯田さん、八反田さんはじめJCS事務局の皆様、舞台関係は一切お任せできた渡辺さん、松岡さん、そして直近月からお手伝い下さったICC事務局スタッフ、これらの皆様に心からの感謝と御礼を申し上げます。皆様全員

のご尽力がなければICCのあの成功はなかったと思います。

先に自己批判をしましたが、それらはすべて準備する主催者側の責任者として当然ですが、チェロが現世に現れて以来の規模・内容で行われたICC。その結果をシュタルカー氏、グリーンハウス氏、そしてロストロポーヴィチ氏のお三方が口をそろえてその成功と素晴らしさを祝福してくださったのは事実。私たちは無条件でその祝福を受容し、喜んで良いのです。

次なるICCをJCSが再び力になれることを念じつつ「ICCを終えて」の拙文とします。

日本チェロ協会評議委員
International Cello Congress in Kobe
事務局長 松本 巧

ICC事務局体験記

コンサート・ディレクションを務められました児玉真さん、箕口美さん、八反田弘さんに本音トークを交えた、ナマの声を伺いました。

児玉さん箕口さんは日本チェロ協会初代事務局で現在も会員でいらっやいます。八反田さんはサントリーホールで企画運営に携わっており、制作面でご協力頂きました。



チェロコングレスが終わって…

印象深く終わったチェロコングレス(ICC)から一ヶ月、6月のこの1週間はイタリアの地方都市レッジョ・エミリアで弦楽四重奏の国際コンクール「ボルチアーニ・コンクール」の予選から本選まで、22組の団体を朝から晩まで聴き続けておりました。NPOでこの優勝団体を来年6月日本に呼ぶためです。お祭りのような日々とはいえ、今回の場合はどちらかという精神的なハードマラソンで、神経が妙に疲労します。考えてみればICCは頭を使うと言っても、もっと筋肉質のマラソンだったような気がします。スタッフワークとしては、あれだけ音楽のそばにいて、全くと言っていいほど音楽を聴けなかったのは珍しいかもしれません。しかし、決して100点を付けられるような制作ではなかったのですが、現場で頭脳をフル回転させて動き回りながらある爽快さを感じていたのも事実で、そういう意味では不思議な1週間でした(頭脳のほうがコンサート現場の構造になっていたのか、翌日に頼まれていたアートマネジメントの講演はぼろぼろでした)。終わったあと、何人かの方に「今回のコングレスは事務局がしっかりしていてよかった」と言われ汗顔の至りだったのですが、なんとかお祭りの楽しさを演出できたかなと思います。よかった。

このプロジェクトに参加したのは今年の夏前、演奏家の名前がほぼ出そろって、さあそれからどうしようという時期でした。その間胃潰瘍で1月半ほど入院した期間

があったのですが、どの演奏家に何をして頂こうかと病院のベッドの上でパズルのようにあれこれと考えていた全体のプログラミングが、実際にこれだけ多くのチェリストが神戸に集合し音楽が作られていくのを見ると夢のようでもあります。

しかし、この大きなイベントを、様々な経験を持つ人たちが一緒に参加して作る過程で一番感じたのは「コンサートをつくる」と言う事務作業に関する文化の違いです。それは本当に興味深かった。様々なパターンを経験してきたと自負している私でも、この文化風土の差というにはとまどいまして、どこに重心を保つのが良いのかととてもとても迷いました。どれが正しいか正しくないかという判断ではないのです。企画制作、チケットから広報に至るまで一つ一つの事象でやり方の違いが浮き彫りになる訳ですから、最終的によくぞ大同団結できたと思います。その意味では皆様のICCに込める愛情と意欲、大人の対応には本当に頭が下がります。それが成功の最大のポイントだったと思っています。今回は、本当に貴重な体験をさせて頂いてありがとうございました。

2005年6月20日

トリトン・アーツ・ネットワーク 児玉 真 (R-047)

「チェロアンサンブルサロン」の醸成

スタッフにとっては、とにかく走り抜けた1週間でしたが、ひとときのオアシスタイムだったのが、「チェロアンサンブルサロン」でした。グランドコンサートが終わると、チェロを抱えた参加者の方々が、三々五々集まってきます。用意された楽譜を吟味する人たち、すでにチェロケースを開き始めている人たち、ビールとおつまみで乾杯する人たち。円形の会場だったので、真ん中にまあるく演奏スペースをとり、周囲は丸テーブルが配置され、弾くもよし、飲むもよし。初日は林峰男さん、2日目は倉田澄子さん、3日目は山崎伸子さんが「サロンの庵主」役でしたが、三者三様、集まった人たちの雰囲気や気持ちを大事にしての一時になりました。

初日こそ、「一体何が始まるんだろう…」という感じもありましたが、林さんが「とにかくまず音を出してみようや」と、ご自身バッハの無伴奏を弾き始めました。それがきっかけになって、楽譜が飛び交い始め、チェロアンサンブルの豊かな響きが会場を包みます。林さんの「ピチカートの極意！」講座もあり、輪が徐々に大きくなっていきました。

2日目からは、もう自然発生でアンサンブルが始まりました。ふと見ると、丸テーブルにはプロ演奏家の姿も。シュタルケルさんやゲリンガスさんも楽しそうにグラスを傾けていました。ミュンヘンフィルのメンバーは丸テーブルの常連、3日目には彼ら自身がサイレントチェロでがらがら弾いてくれました。

コングレスの会場があるポートアイランドは、盛り場からはいささか離れていたため、アンサンブルサロンは専用カジュアルバーにもなりました。弾かなくても、丸テーブルの方で、最初から最後まで飲んでる参加者もいます。あのなんとも穏やかで、親密な雰囲気は、ちょっと言葉では表現できないものです。思えば、チェロとそ

の音楽に愛着を持っている人たちがプロ・アマ・単なる聴き手という違いを意識する必要もなく、こうやっていっしょにわいわいできる時間は、そう滅多にあるものではありません。山崎伸子さんが、或る音楽セミナーの名物である「室内楽勝手にひきまくり」という時間をヒントに、このアンサンブルサロンを提案してくれました。これを担当させてもらって、いやはや冥利冥利...というのも、明日の準備にどたばたしている他のスタッフには申し訳なかったのですが、ワインのボトルを片手に、この時間を一番堪能させていただきました。楽譜の準備から当日の進行まで大活躍だった、石島栄一さん、渡辺一騎さん、宮川浩さんにも大きな拍手を！でした。

箕口一美 (R - 174)

素晴らしい祭典

これまでに音楽イベントに限らず様々なイベントに関わって来ましたが、この kongress の概要を説明されたとき、僅かながら慄きを覚えたのと、他方とてつもなく素晴らしい祭典が繰り広げられるであろう「夢」を運んでくれもしました。

名古屋、神戸と数度の打合せに参加するにつけ、どのようにこのイベントが建ち上がるのか、自分の中で設計することが出来ず、不安を拭い去ることが出来ませんでした。夢があり、目的が明確で、実現を望む人が世界中にいて、ネットワークもあるのに.....現実問題として途方もなく大きなうねりの中に迷い込んだような、そんな一年でした。

イベントの1週間に誰が何をどのようにやるか、それを関係者が確認し合うのに約半年。そこから具体的な専任のスタッフィング、出演者や共演者への打診、ツメ、契約、公演の告知(単に券売のみならず、マスタークラス、参加者登録、海外への情報発信、国内の音楽大学や団体、マスコミなど多岐に渡る) 券売、会場確認等など。12月はじめの記者発表が過ぎてからは一足飛びに kongress が現実的なものとなり、以来馬車馬のごとく関係者と連日打合せ、交渉の日々でした。

そういう中で、kongress の制作を主に携わってきたわけですが、とりわけ留意してきたのは「マニュアル」作りに関してだったと思います。関係者一同が適宜各自の仕事に専念するためには適切なマニュアル作りが不可欠でありました。今回は参加チェリストの皆さんのみならず制作・運営側にもプロとアマチュアが混在し、更に内外からのボランティアの皆さんも大勢参加されていました。複数の会場で複数のイベントを安全確実に同時進行させて行かねばならないという作業は大げさなようですがオリンピックや、博覧会などの大イベントにも通じる作業だったのではないかと思います。

何はともあれ、ICC事務局には内外から有能なスタッフの皆さんが積極的に参画され、未知数の領域にまで踏み込んで喧喧諤諤、議論伯仲しながらの毎日でしたが、それでも忘れがたい体験を実感できました。間違いなく音楽史に記録されるべき大事業を為し得た関係者の皆さんに・・・Bravo!!!

そしてやっぱり・・・「チェロ・チェロ・チェロ」

サントリーホール 八反田 弘

チェロサロン

開催！ 4月10日(日)

4月10日(日)河野文昭先生によるチェロサロンが開催されました。クリニック受講者数は6名と予定より増え、気がつけば一人当たり30分とたっぷり時間をとっていただき、楽しいわかりやすいレクチャーを交えクリニックが進行しました。そして、当初予定をしていなかったアンサンブル演奏も、当日河野先生がご用意して下さった楽譜で即興され、皆様で楽しんでいらっしゃいました。

日 時 4月10日(日) 14:00 ~ 17:30

会 場 サントリーホール・リハーサル室

参加費用 無 料

講 師 河野文昭先生(日本チェロ協会評議委員)

参加人数 18名

敬称略 講師1名

会員7名(河野美也、鈴木文弘、長浜光子、福永文子、福代茂、村上美樹、山口浩史)

非会員6名、事務局4名

チェロサロンを終えて

河野文昭先生

今回は私としては久しぶりのサロンでしたが、最近自分がどのように音楽に向きあいながらチェロを弾いているか、ということをお伝えしたくて、ややお堅い印象でしたが「楽譜の読み方、音楽の味わい方」という題でやってみました。

ほとんどがアマチュアの方々でしたが、皆さんの演奏のレベルがとても高いのに驚きました。バッハの6番など本当に大丈夫かしらん?などという心配はすぐによそへ行ってしまふほど、よく弾いていらっしゃいました。おそらく普段の忙しい生活の中での、貴重な練習時間をいっぱいに使ってさらっていらしたのでしょう。私としては、そこにもうひとアイデアを差し上げることで、日々の練習に新たな目標ができるようにと思い、いろいろなお話をしたつもりです。

特に、音楽そのものが持つ「真の魅力」を求めていれば、自ずとチェロを弾くためのテクニックにも好奇心が湧き、努力目標のようなものはつきりするのではないのでしょうか。そのような魅力を発見するためには、CDを聴くだけでなく、もう一度楽譜をじっくりと見直し、自分の目で新たな発見をすることが大切です。そのことで音楽の喜びがさらに大きくなり、また演奏の自信にも

【タイムテーブル】

時 間	内 容	詳 細
13:40	受付	出欠チェック
14:00~17:00	クリニック	クリニック受講者： 6名
14:00	鈴木 文弘さん	バッハ：無伴奏組曲第6番サラバンド
14:30	紫竹 友梨さん	ポッパー：ハンガリアンラプソディー
15:00	山口 浩史さん	バッハ：無伴奏組曲第6番アルマンド、クーラント
15:30	河野 美也さん	S.LEE: Melodic Studies 作品31 - 10
16:00	福永 文子さん	サン＝サーンス：白鳥
16:30	福代 茂さん	滝廉太郎：花
17:00~17:30	アンサンブル	オルランド・ギボンス：銀色の白鳥 ジョルジ・リゲティ：2つのカノンより「おしゃべりおばさん」
17:30	終了	

つながると思います。

さて、参加された方々のコメントの中にありましたが、チェロ歴の先輩方から、「音が拾えなくては全く意味がない」「ろくに弾けないうちから曲のイメージだなんて間違いだ」と、言われることが、このところ相次いでおりました。という経験をなさったことがたいへんに残念でなりません。私に言わせれば「音を拾えても音楽がなければ、全く意味がない」「曲のイメージをもつことなしに練習をスタートするなんて、間違いだ」ということになります。これはアマチュアの方々に限らず、チェロを専門に勉強している若い人たちにもぜひとも意識してもらいたいことです。

クラシック音楽というジャンルは、現代まで何百年も色あせずに生き長らえてきました。そこには汲めども尽きぬ奥深い魅力があるわけで、我々は演奏を重ねるごとに、楽譜を読めば読むほどに、常に新しい発見をします。皆さんもどうぞ、そのような発見の喜びを体験なさって、「この曲を(あるいはこのフレーズを)こんな風に表現してみたい！」そして「チェロを弾きたくてたまらない！」と体がうずうずしたら、いよいよチェロを手にとって、さあ楽しみましょう！

参加者の声

鈴木文弘さん (R - 129)

あこがれの河野先生のサロンには前回は参加させていただきました。その折にも音楽の構造から始まり、楽譜を深く読んであるべき表現を自らの視点で追及するというアプローチでした。私は自分としては最も好きだが最も弾けない6番の、中でも難しいサラバンドに挑戦致しました。

3拍子で2拍目にストレスが来るこの舞曲に対してバッハが1番から6番までで試みた音楽的実験の比較という幅広い視点から山口さんが弾いたアルマンドも含めて明快で説得力の強いさまざまな分析をお話し下さり、そののみか目の前でやすやすとその分析に則した美しい表現を実際に見せて下さり、またしても尊敬の念を強くいたしました。

クリニックではかねてから大いに自覚はしていますが、特にアコードのボウイングで力んでしまい、肩が

上がってしまうこと、夢中になると口がみっともなく開いてしまうこと等を指摘いただき、それらの克服のための練習の仕方丁寧にお教えました。話しながらでも弾けるようにならなければならないこと、外にもうひとりの客観的な自分をイメージしながら弾くというヒントをお話くださいました。(実際に河野先生はそれらを体現するために、6番のプレリュードの早いパッセージを話しながら完璧にお弾きになり、驚嘆。)

ボウイング・ピブラート・フィンガリングの原則と練習の仕方についてはそれぞれ・ボウイングでは曲によってレガートの中にも音に変化をもたせること・ピブラートでは右手と左手の動作が独立性を獲得するために異なった振幅のピブラートに対してpp~ffまでのすべてのロングトーンの組み合わせで練習してみること・フィンガリングではフレーズに合ったポジション移動を行うのが音楽の流れを阻害しないやり方であること等々の「ほんとうのこと」を教えてくださいました。

今後もこのようなクリニックを受けたいと強く思います。それまで果たして少しは言われたことが身体に入っていることやら...

河野美也さん (R - 218)

初めて受講させていただきましたが、非常に感銘深いものでした。新しい視座を得ることができ、大いに勉強になりました。コンサートで演奏を聴くだけでは汲み取れなかった、先生の研鑽の背後にあるものを垣間見ることができたと思います。このような機会は本当に貴重です。是非また同様の企画を望みます。

以下、「譜面の読み方面白い方」というテーマに沿ったもので、特に印象に残ったポイントを書きます。(その他も、技術的なヒントを沢山いただきましたがここでは割愛します。)

- ・「面白いと思うところを見つけて面白いがる」
- ・「ここが素敵だと思ったら、そこを素敵に弾く練習をする」
- ・「音の運動、方向性を考える」
- ・「自分の楽器の音を遠くから聴く」
- ・「飾りの音と本流の音を弾き分ける」

山口浩史さん (R - 172)

チェロサロンでは大変お世話になり、有難うございま

した。河野先生のクリニックは、チェロ奏法にとどまらずに、音楽自体の表現を考えさせられる内容の濃いものだったと思います。受講者一人一人に対して、それぞれの確かなアドバイスをなさせてその結果皆のチェロから出てくる音がどんどん音楽的になってくる様子は感動的でした。

バッハの6番組曲が、アウトドア音楽の集大成であるというお話など、目からうろこが落ちるようなお話が聞けてとても勉強になりました。先生の造詣の深さに感心すると同時に、音楽の表現のためには多種多様な教養を身につけておかなければいけない、ということを感じました。

要望としては、参加者同士であまり交流する機会がなかったのが少し残念でしたので、自己紹介とか、懇親の場があるともっと楽しいのでは?と思いました。また次回を楽しみにしております。

村上美樹さん (R - 182)

本当に楽しいひとときを、どうもありがとうございました。私事ですが、チェロ歴の先輩方から、「音が拾えなくては全く意味がない」ろくに弾けないうちから曲のイメージだなんて間違いだ」と、言われることがこのところ相次いでおりました。そのとおり、とも思う反面何か違和感を感じておりましたが、先日のチェロサロンでまずは、自分の思うところを楽譜から読み取れるところを到達地点としてそこへ向かうにはどうしたらよいか(どう練習したらよいか)ということをお話していただきました。

本当に、今後のチェロ人生、と申しますと大げさですが、転換、とまではいかななくても大きなヒントを得ることができました。今後とも、いろいろお世話になることと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

福永文子さん (R - 205)

あれから何日か経ってしまいましたが、チェロサロンでは大変お世話になりました。

おかげさまで、ほとんど飛び入りでしたが河野先生にアドバイスを直接頂くことができました。前日にお電話いただいてなかったらチェロを置いてきてしまっていたかもしれません。お気遣いいただき、ほんとうにありがたく存じます。チェロがあると無いとでは得るものは、また違っていただいでしょう。

先生が、「やはり、アンサンブルを…」とおっしゃって、やはり、チェロ弾きは、チェロが集まったらアンサンブルせずにはいられなくなるものなのかも...と思いました。

毎回、驚くことなのですが、講師はいつもお忙しく著名なチェリストであられる方ばかりなのに、ものすごい集中力、指導力、表現力、そして、どんなレベルの者にも気を配られるその心の広さに、尊敬の気持ちでいっぱいになります。暗い情報ばかりさわがしいこの世にあって、チェロサロンは天国のようです。また、次回のチェロサロンを楽しみにしています。

チェロコングレス“奥貫裕子さん”事務局終了

2004年4月より、チェロコングレス開催に向けて事務局専任スタッフとして一緒に仕事をして参りました奥貫裕子さんが7月で終了となります。

英語が堪能な奥貫さんには出演者関連のレター作成や連絡を中心に、ちらし、パンフレットの発送作業など何でも担当していただき頑張っていたいただきました。どうもありがとうございました。

奥貫さんより一言ご挨拶：

日本チェロ協会にて1年間コングレスの担当をさせて頂き、評議委員・会員の皆様には大変お世話になりました。常に温かく指導下さったチェリストの皆様に改めて御礼申し上げます。事務局に居ながらにしてチェロの魅力を存分に味わえた1年間でした。7月を持ちまして当業務を終了させて頂きますが、今後も何らかの形でチェロと関わっていく機会があれば幸いです。本当にありがとうございました。(奥貫裕子)

次回“チェロサロン”の予定

次回のチェロサロンは、シカゴ交響楽団現役チェロ奏者のドナルド・モリーンさんをお招きして開催を予定しております。詳細が決まり次第、ホームページ、別途郵送でご案内致します。お楽しみに！

日 時：2005年9月25日(日) 14:00~16:30予定

場 所：サントリーホール・リハーサル室

主 宰：ドナルド・モリーン先生

編集後記

チェロ・コングレスが無事盛況に終わりほっとしております。私もスタッフの1人としてホテルと3会場を走り回り、大変ではありましたがとても充実した10日間を過ごせ、チェロの思い出がまたひとつ増えました。普段は電話や手紙を通じてしか接することができなかった会員の方々と初めてお目にかかり、お話することもできました。今年に入り新規入会の方も増えており、うれしく思います。今後、マスタークラス、チェロサロンなどのイベントを会員の皆様のアイデアなどをどんどん取り入れて一緒に作っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

日本チェロ協会会報 (JCS NEWS) 第23号

2005年7月31日発行

発行：日本チェロ協会

東京都港区赤坂1-13-1 サントリーホール内

電話 03-3505-1001 FAX 03-3505-1007

発行人：堤 剛

編集：日本チェロ協会事務局

編集協力：リュウカンパニー